

魚種（海域）：ハタハタ（日高海域）

担当：栽培水産試験場（岡田のぞみ，吉村圭三）

要約

評価年度：2019年度（2019年1月～2019年12月）

2019年度の漁獲量：33トン（前年比1.71）

資源量の指標	資源水準	資源動向
刺し網 CPUE	中水準	不明

2019年の漁獲量は約33トンで、前年（19トン）と比べほぼ同等の低い水準であった。刺し網のCPUEの推移から、2019年の資源状態は中水準と判断された。漁獲努力量は減少する傾向にある中、数年に一度高豊度年級群が発生することで資源は大きく変動しつつも維持されてきた。今後も同じように高豊度年級群が発生するのであれば、同様に推移していくと考えられるが、4年級群連続で加入量は低位であると予測されており、資源状態がさらに低下していく可能性に注意が必要である。

1. 資源の分布・生態的特徴**(1) 分布・回遊**

索時期には日高および十勝海域に広く分散している。秋に主群はえりも岬東方海域を南下・西進し、えりも以西の沖合域に移動するとされ、11月下旬から12月上旬になると産卵のために接岸する。

(2) 年齢・成長（加齢の基準日：1月1日） (10～12月時点)

	性別	満年齢				
		1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
体長（cm）	オス	14	16	18	21	
	メス	16	20	23	24	25
体重（g）	オス	41	68	95	147	
	メス	64	147	220	274	302

（1998～2007年の刺し網漁獲物測定資料）

(3) 成熟年齢・成熟体長

- ・ オス：0歳から成熟する個体がみられ、1歳でほとんどが成熟する。
- ・ メス：1歳でほとんどの個体が成熟する。

（1998～2001年11～12月時の刺し網の漁獲物測定資料）

(4) 産卵期・産卵場

- ・産卵期：11月下旬～12月上旬
- ・産卵場：えりも町東洋～様似町冬島を中心とした、えりも町～新ひだか町の沿岸域

(5) その他

特になし

2. 漁業の概要

(1) 操業実勢

漁業	漁期	主漁場	主要な漁具	着業隻数（2019年度）
沿岸漁業	盛期： 11～12月	沿岸域一帯 （えりも町～様似町 冬島が中心）	はたはた刺し網，その他刺し網， ししゃも桁網など	えりも漁協所属はたはた 刺し網漁船：約35隻

(2) 資源管理に関する取り組み

- ・漁獲量が最も多いえりも町えりも漁協では（表1），小型魚（全長14cm以下）の出荷禁止，刺し網漁具の目合規制（1.4寸以上の使用），網数規制（1日1隻あたりの使用反数50反以内）および春期のはたはた刺し網漁の禁止等を自主的に行っている。
- ・2003年以降については，魚価の下落（図1）をうけて，1.4寸以上であった規制目合を2.0寸以上にすることなどにより価格の高い大型魚を中心とした漁業を行っている。また，漁期前半に来遊する大型魚が獲れなくなった時点で自主的に終漁するというように，操業日数の短縮が実施されている。

3. 漁獲量および漁獲努力量の推移

(1) 漁獲量

日高海域におけるハタハタの漁獲量は，1956年には1,688トンであったが，その後は大きく年変動しつつも長期的にみると減少傾向にあり，1976年には117トンとなった（図2）。1977～2001年にかけての漁獲量は年変動しつつも137～542トンの間でほぼ横ばいで推移していたが，2002年以降は減少傾向にある。2013年以降は100トンを超える低い水準が続き，2017年には15トンと1953年以降で最も少なくなり，2019年は33トンと前年の19トンから増加したものの，低い水準にとどまった。

当資源の漁獲量のほとんどを占めるえりも地区のはたはた刺し網について，各年の日別漁獲量の推移を図3に示した。2019年は，水揚げがあった日数が10日で前年（15日）に比べて減少した。盛漁期は11月25日～11月27日で，11月27日に漁獲量のピーク（12トン）がみられたがその後漁獲量は減少し，12月7日に終漁となった。

沖合底びき網によるハタハタ漁獲量は，1985～1995年の間は5～12トンを記録した年もあるものの期間を通して漁獲量は少なく，1996年以降はほとんど漁獲されておらず，2019年も漁獲がなかった（表1）。沿岸漁業では，はたはた刺し網による漁獲量がほとんどで，年間漁獲量の8割以上を占めている。その他では，ししゃも桁網やかれい刺し網でわずかに

漁獲されている。

当海域の沿岸漁業による漁獲物について、各地区各月の漁業種ごとに算出した単価の平均値として算出した1 kgあたりの単価は、1989～2000年の間は1,000円前後で推移していたが、2001年以降単価は下落し、2009～2012年には300円台にまで低下した(図1)。その後単価は若干上昇したが、2018年の単価は357円と過去最低の値になった。2019年は若干回復して445円であった。

(2) 漁獲努力量

えりも漁協おけるはたはた刺し網漁業の着業隻数は、2001年には243隻、2006年には152隻であった(図4)。2006年以降着業隻数は単調に減少しており、2018年には35隻と過去最低を更新し、2019年も35隻であった。のべ出漁隻数は、2006～2010年の間は、2007年(485隻)を除き800～900日・隻であったが、それ以降減少しており、2011～2016年は200～600日・隻、2017年には最も少ない97日・隻となり、その後わずかに増加して2019年は130日・隻となった。漁獲量の最も多いえりも町では、2003年以降、価格の高い2歳以上の大型個体を選択的に漁獲するために、刺し網漁具の目合の拡大(1.4寸から2.0寸に拡大)に加えて、操業日数の短縮(漁期前半に来遊する大型魚が獲れなくなった時点で自主的に終漁)が行われている¹⁾。最近の漁獲努力量の低下は、こういった措置も一因であると思われる。

4. 資源状態

(1) 現在までの資源動向：年齢組成、CPUEの推移

3-(1)に記載のとおり、当海域のハタハタ漁獲量は1950年代から1970年代初頭にかけて急激に減少し、1977～2002年の間はそれ以前と比較して低いレベルではあるが、ほぼ横ばいで推移していた(図2)。そして、2003年以降はさらに減少傾向にある。当海域の漁獲量のほとんどを占めるえりも漁協では、2003年頃から小型魚保護のため、刺し網の目合の拡大や操業日数の短縮といった漁業管理を行っている。これらの取組が功を奏し、漁獲物の年齢組成をみると2002年以前では1歳魚がいずれの年でも漁獲量の多くを占めているのに対し、2003年以降は2～3歳魚が中心となっている年がたびたび見られる(図5)。したがって近年の漁獲量の減少は、資源状態の悪化と漁獲努力量の減少の両方によると考えられるため、漁獲量が必ずしも資源量の変動を表していない。そこで、えりも漁協の漁獲統計データが利用可能である2006年以降について、えりも漁協はたはた刺し網のCPUEを指標として資源状態を判断した。2006年のCPUEは155.3kg/日・隻で、その後概ね上昇傾向を示し2012年には329.1kg/日・隻となった(図6)。これは2008および2010年級群が比較的高豊度で加入したことが要因の1つであると考えられる(図7)。しかし、2011および2012年級群の豊度が連続して低かったこともあり、CPUEは2013年に一転して大きく減少したが、2015～2016年にかけてCPUEは再度上昇した。これは2014および2015年級群の豊度が高かったことが要因の1つと考えられる。CPUEはその後減少したが、2019年はふたたび増加し

て 251 kg/日・隻であった。ただし、近年は 4 年級連続で加入量の水準が低く推定されている（図 7）。2019 年は操業日数が 10 日間と過去最低であり、このことが CPUE の増加につながっている可能性がある。

(2)2019 年度の資源水準：中水準

当海域のハタハタについては、前述のとおり漁獲量の変動には資源量の変動以外にも漁家数の変化や目合の変更による漁業実態の変化などが影響していると考えられる。したがって、資源状態の指標には漁獲量のほとんどを占めるえりも地区のはたはた刺し網 CPUE を用い、2006～2018 年の平均値を 100 として各年を標準化し、 100 ± 40 の範囲を中水準、その上下を高水準、低水準として資源水準を判断した。これによると、2019 年の資源水準指数は 138 で、資源水準は「中水準」と判断された（図 8）。

(4) 今後の資源動向：不明

2003 年以降、当海域では主な漁獲対象は 1 歳魚と 2 歳魚で一部の年では 3 歳魚の割合も高くなっており、2017～2019 年も 1 歳魚の割合が小さかった。2010～2015 年で見ると、えりも町庶野海域で行われたシシヤモ調査で混獲されたハタハタ 0 歳魚の 1 曳網あたりの採集個体数は（評価方法とデータ（4）参照）、同年級群の 1 歳時漁獲尾数と正の相関がみられた（図 9）。しかし、2015 年級群のシシヤモ調査での 1 曳網あたりの採集個体数は 1247.3 と非常に多かったにも関わらず、この年級群の 1 歳時漁獲尾数はそれと比例して高い値とはならなかったことから、2010～2018 年で見ると、両者の関係に有意な正の相関がみられなくなった。また、シシヤモ調査で混獲される 0 歳魚の採集個体数と、同年級群の 2 歳時の漁獲尾数との間にはデータの蓄積は少ないが 0 歳時採集数が多い年級群は 2 歳時漁獲尾数も多い関係にあったが（図 9）、この関係においても 2015 年級群の点加わることで両者の関係は不明瞭になった。これらの要因については不明である。そこで今回は本調査結果から資源状態を予測することはせず、他に判断材料がないため 2019～2020 年にかけての資源動向は不明とした。

本調査結果は資源動向の予測に用いなかったが、2015 年級群を除けば、本調査で 0 歳時の採集個体数が多いと 1～2 歳時の漁獲尾数が多い傾向にある。2020 年に 1 歳魚、および 2 歳魚となる 2019、2018 年級群の 1 曳網あたりの採集個体数は 0.5 および 10.0 で、2010 年以降で最低の水準であり、4 年級連続で加入量が低位であることから、再生産関係が悪化している可能性もあり、注意が必要である。

5. 資源の利用状況

当資源については、資源量の推定が行われていないため、漁獲割合や加入量あたり漁獲量などの算出およびそれらに基づく資源の利用状況の分析は行えない。

当海域の主漁場であるえりも町におけるはたはた刺し網の着業隻数は減少傾向にあり、のべ出漁隻数も 2011 年以降低く保たれている（図 4）。こういった漁獲規模の下で、2010 年

級群のような高豊度の年級群が加入することで（図 7）、資源状態の一時的な回復もみられた。また、えりも町では、漁期前半に来遊する大型魚が獲れなくなった時点で終漁する措置や、索餌期のはたはた刺し網の操業を自粛するといった自主的な管理を行っている。長期的な加入動向を判断する指標はないが、数年に 1 度の高豊度の年級群の出現が今後も続くと仮定すれば、現在の資源の利用状況は概ね適切であると考えられる。ただし、現在の漁獲対象は 1～3 歳魚で、2 歳魚が主体という資源構造をしているので、本資源は毎年の加入量によって資源状態が大きく変動する特徴をもっている。2011～2012 年級群のように、加入量が 2 年連続で低くなると、2013～2014 年のように資源水準は大きく低下することが観察されている。2016～2019 年級群についてもこの条件に当てはまっており、今後の加入量次第では資源状態が悪化していく可能性があることに注意が必要である。

評価方法とデータ

(1) 資源評価に用いた漁獲統計

沿岸漁業による漁獲量は漁業生産高報告に基づく（2019年の値は水試集計速報値）。沖合底びき網漁業の漁獲量は、北海道沖合底曳網漁業漁場別漁獲統計年報の小海区「静内三石沖」～小海区「浦河沖」における漁獲量を集計した。

(2) 年齢別漁獲尾数および重量の推定方法

年齢基準日は1月1日とし、耳石輪紋数から年齢を推定した。

沿岸漁業の雌雄別年齢別漁獲尾数を算出するために用いたはたはた刺し網漁業の銘柄別漁獲量は、管内の漁獲量の大半を占めているえりも漁協から入手した。また、えりも漁協で漁獲されたハタハタについて、銘柄別に標本を採取し生物測定および耳石による年齢査定を行った。以上の調査により得られた漁獲物の生物測定結果、銘柄別漁獲量データ、そして海域全体の漁獲量を用いて、海域全体の雌雄別年齢別漁獲尾数を推定した。

(3) えりも漁協所属はたはた刺し網漁業の着業隻数、のべ出漁隻数、CPUE

2001年には水産試験場がえりも漁協にはたはた刺し網の着業隻数の聞き取りを行っており、この年については着業隻数が把握されている。また、2006年以降については、えりも漁協から提供を受けた詳細な水揚げデータによって、着業隻数、のべ出漁隻数（日・隻）の集計が可能であるため、これらを漁獲努力量の指標とした。

同じデータを用いて集計されたはたはた刺し網による漁獲量を上記ののべ隻数で除することにより、CPUEを算出した。

(4) シシャモ調査で採集されたハタハタ0歳魚の採集個体数（1曳網当たり）

釧路水試が8月下旬～9月中旬にかけて実施している十勝～庶野海域シシャモ漁期前調査のうち、庶野海域の4調査点（庶野水深20 m、庶野水深30 m、百人浜水深20 mおよび百人浜水深30 m）で採集されたハタハタ0歳魚の1曳網あたりの採集個体数を算出し、これを当海域の年級群豊度の指標値になるものと仮定して、資源動向の判断に用いた。

文献

- 1) 筒井大輔：Ⅲ-3日高群．技術資料No.7 北海道のハタハタ資源，63-75(2011)

表1 日高海域における地区別ハタハタ漁獲量(トン)

年	日高町	新冠町	新ひだか町	浦河町	様似町	えりも町	小計	沖底	合計
1985	1	6	4	20	56	120	208	12	220
1986		2	26	12	22	115	177	4	181
1987	2	5	35	12	20	423	497	0	497
1988		1	11	8	37	238	295	0	295
1989		9	49	30	43	104	235	0	235
1990		1	18	30	44	260	353	6	359
1991		0	31	30	101	152	314	0	314
1992		1	37	22	88	297	445	1	446
1993	2	2	43	24	102	369	542	5	547
1994	1	1	23	28	105	192	350		350
1995	0	0	11	14	83	238	347	8	355
1996	0	0	3	11	32	166	212	0	212
1997	1	1	18	19	120	239	397	0	397
1998	0	1	6	8	87	261	362	0	362
1999	0	0	4	6	50	160	221		221
2000	0	0	2	5	41	89	137		137
2001	0	1	12	12	102	273	401	0	401
2002	0	1	6	4	86	292	390	0	390
2003	0	1	5	2	34	198	242	0	242
2004	0	1	4	4	19	107	135	0	135
2005	0	1	4	2	10	224	240	0	240
2006	1	2	6	3	15	138	164	0	164
2007	1	1	7	4	14	88	113		113
2008	0	0	3	1	10	70	84	0	84
2009	1	1	8	3	29	185	227	0	227
2010	0	0	2	2	26	187	218	0	218
2011	0	0	1	1	8	155	166	0	166
2012	0	0	0	0	0	135	135		135
2013	0	0	0	0	1	38	38		38
2014	0		0	0	3	43	46		46
2015	0	0	0	0	2	78	81		81
2016	0	0	0	0	0	64	64		64
2017	0	0	0	0	0	15	15		15
2018	0		0			19	19		19
2019	0		0	0	0	33	33		33

※ 空欄は漁獲がなかったことを、「0」は漁獲量が500 kg未満であることを示す。

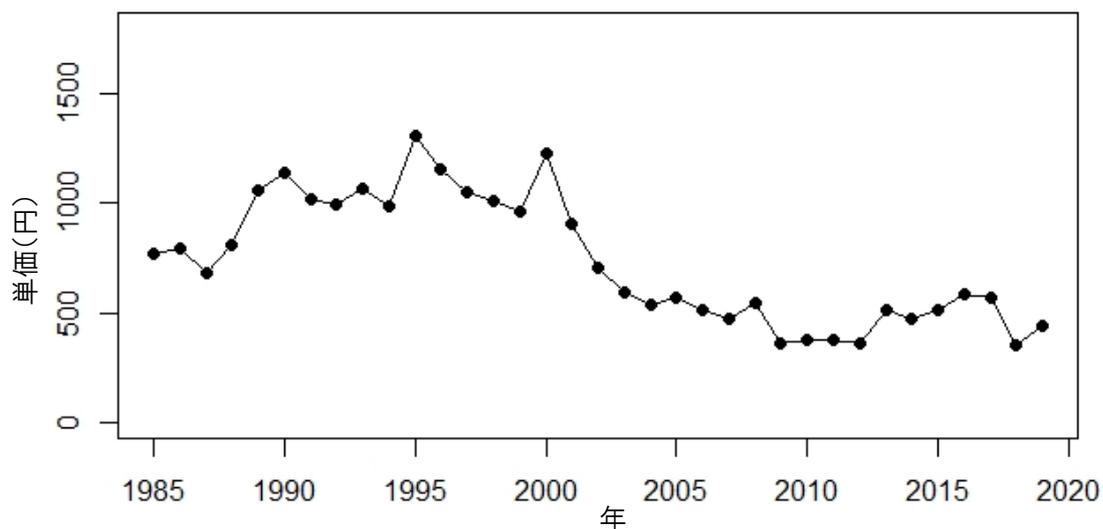


図1 日高海域におけるハタハタのキロ単価(総水揚金額/総漁獲量)の推移

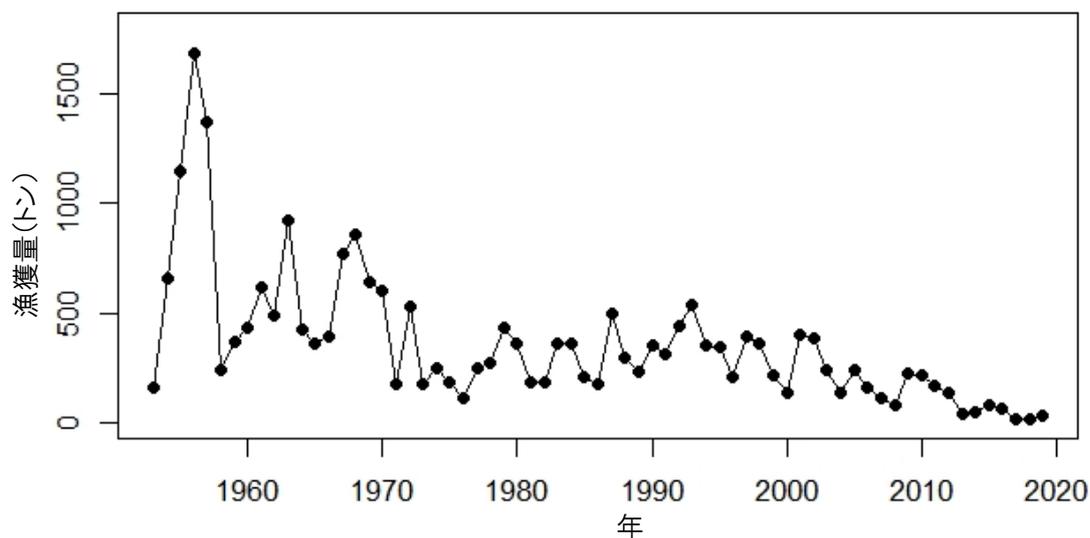


図2 日高海域におけるハタハタ漁獲量の長期的な推移

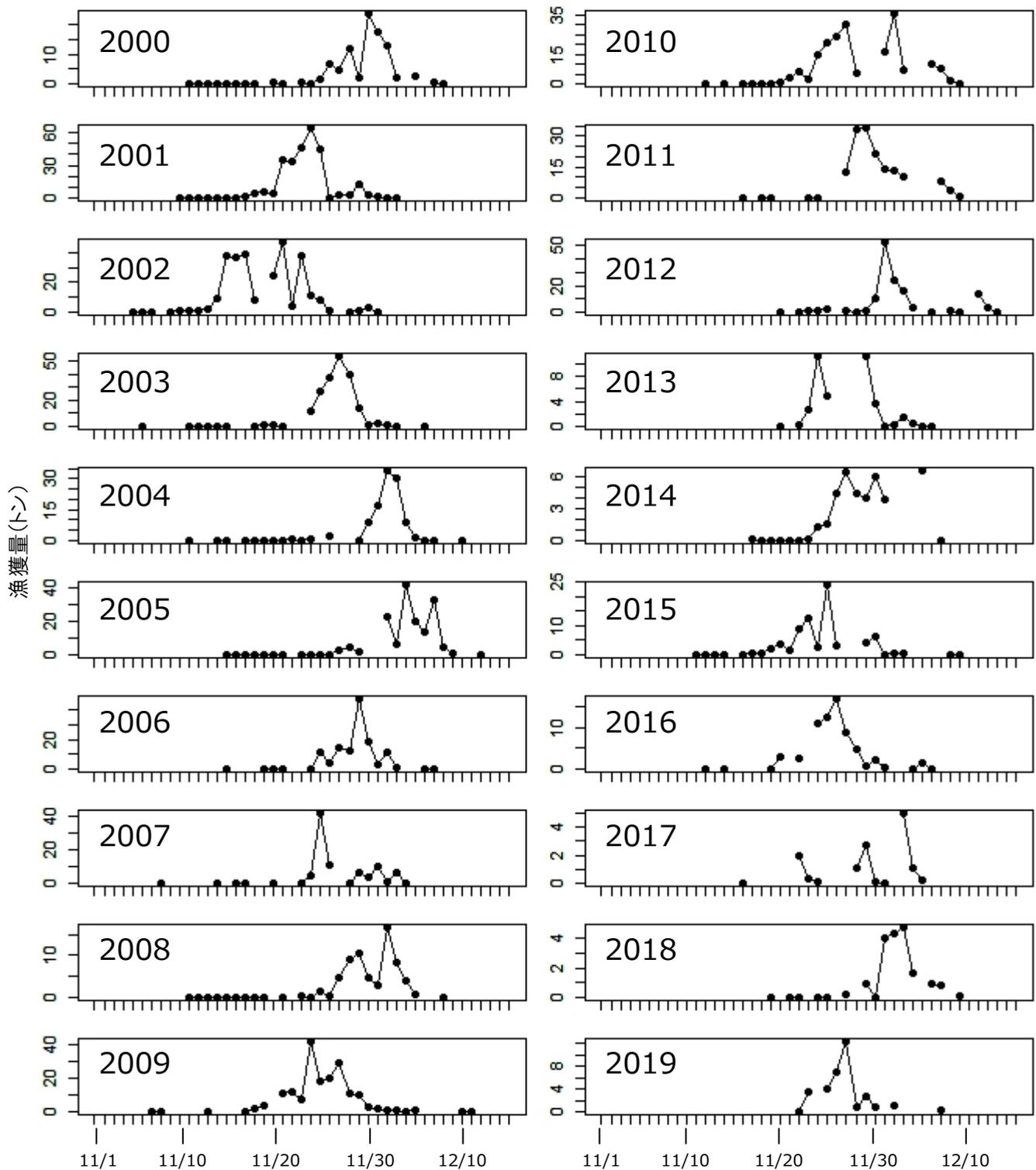


図3 えりも地区におけるはたはた刺し網漁業の日別漁獲量の推移

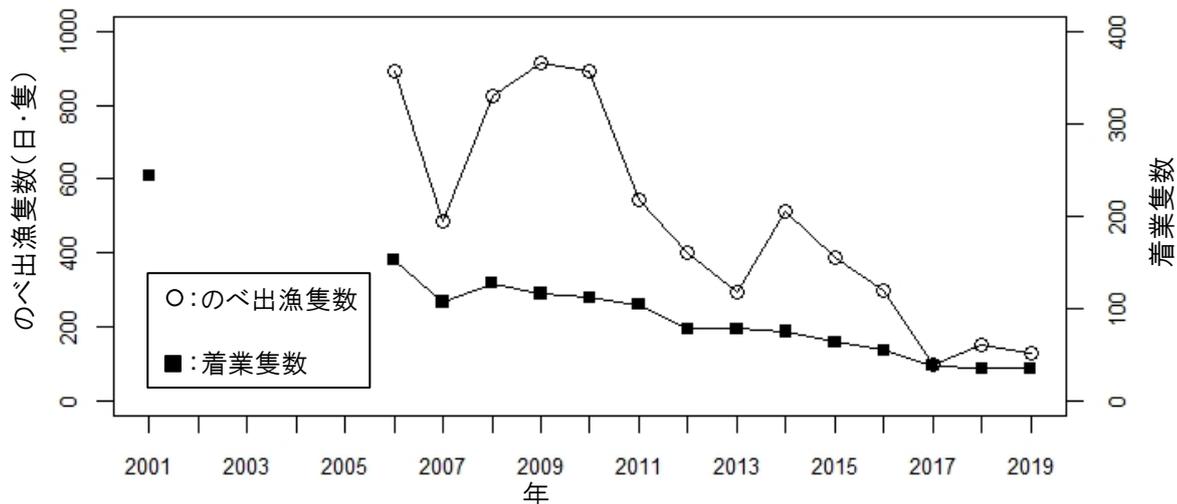


図4 えりも地区におけるはたはた刺し網漁業ののべ出漁隻数(日・隻)および着業隻数(隻)の推移

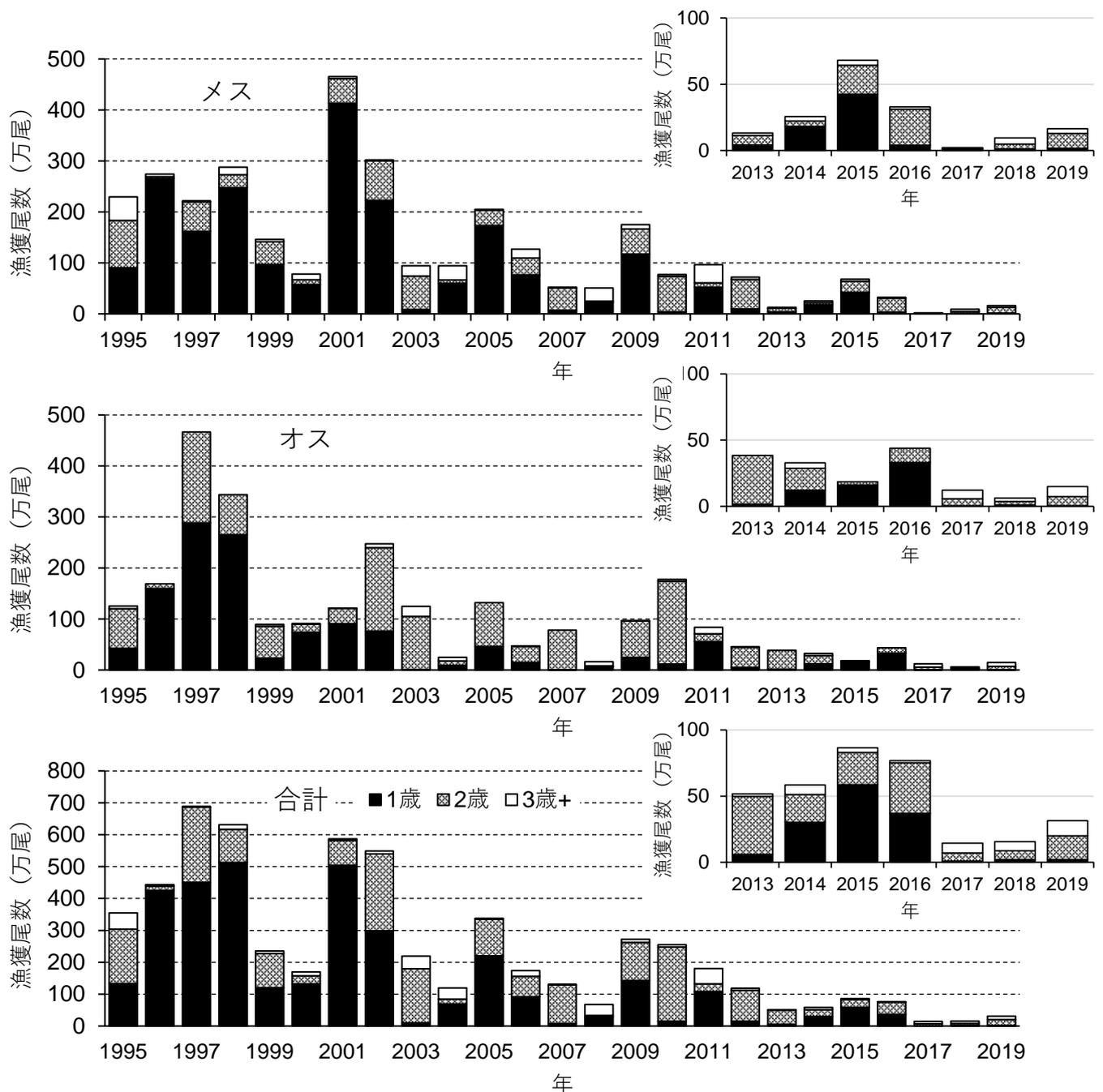


図5 日高海域におけるハタハタの年齢別漁獲尾数

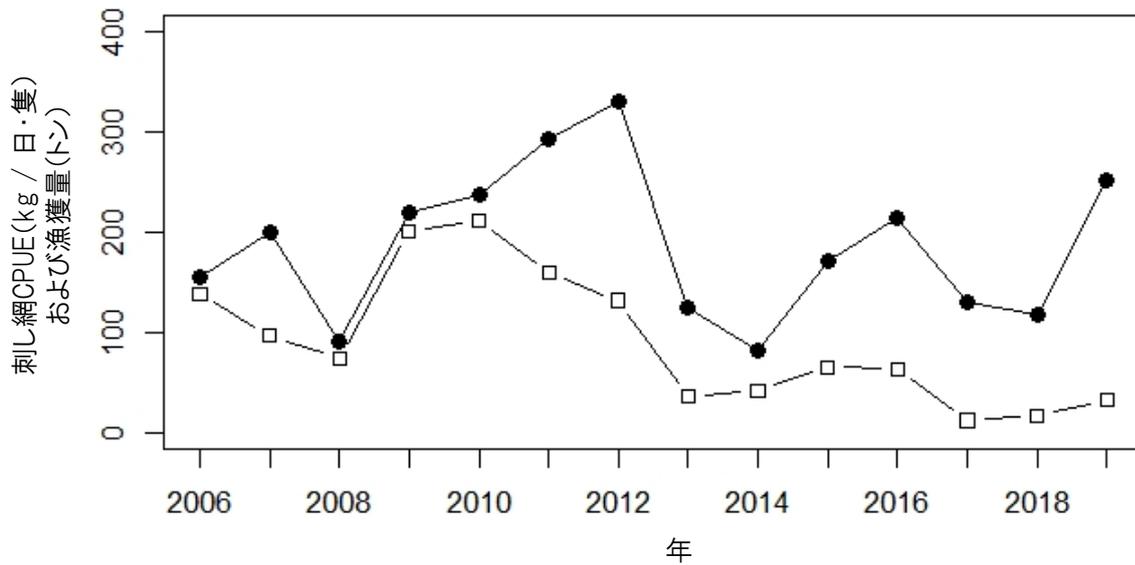


図6 えりも漁協所属はたはた刺し網船のCPUE(kg/のべ隻数)および同刺し網船による漁獲量の推移
●;刺し網CPUE(kg/日・隻), □;漁獲量(トン)

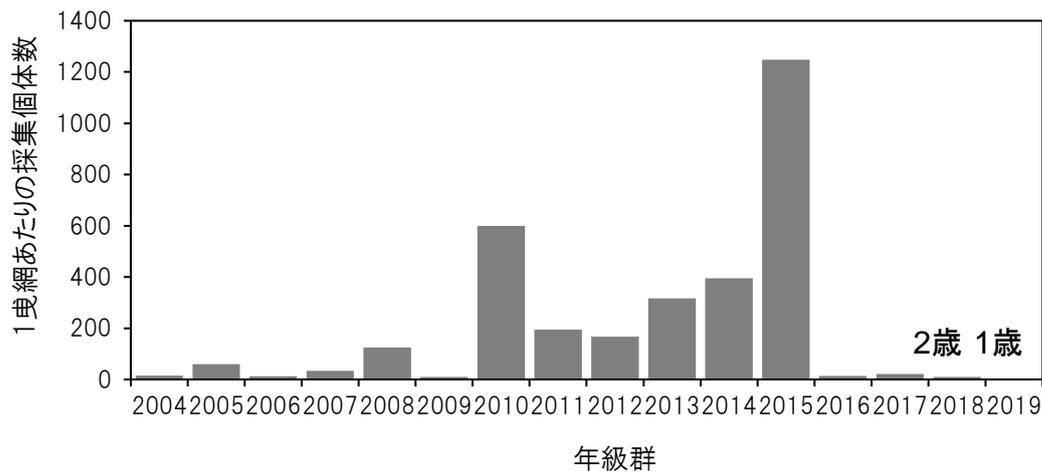


図7 シシャモ調査(庶野海域)で採集された0歳魚の1 曳網あたりの採集個体数
グラフ内の年齢(1歳および2歳)は、2020年にそれぞれ1歳および2歳魚となる年級群を指す

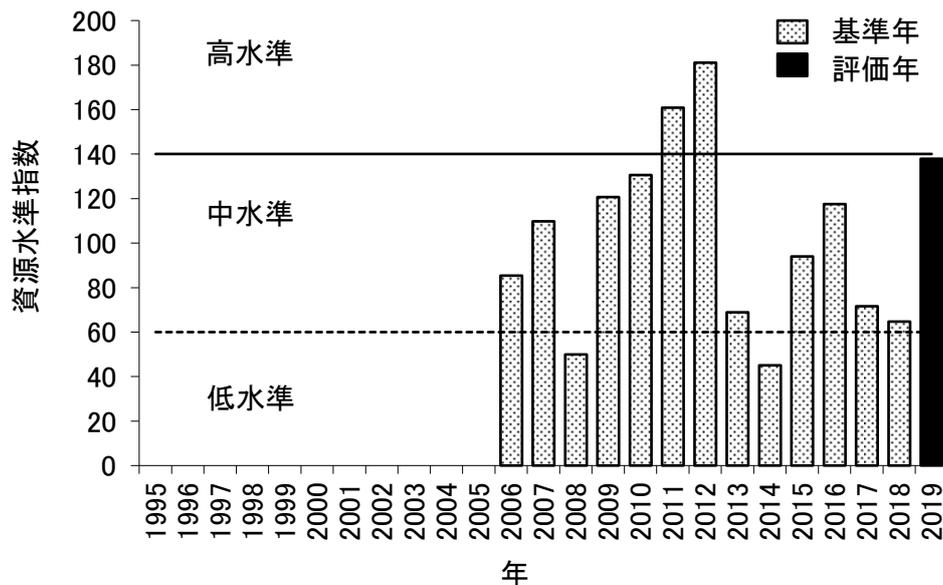


図8 日高海域におけるハタハタの資源水準(資料は刺し網CPUE)

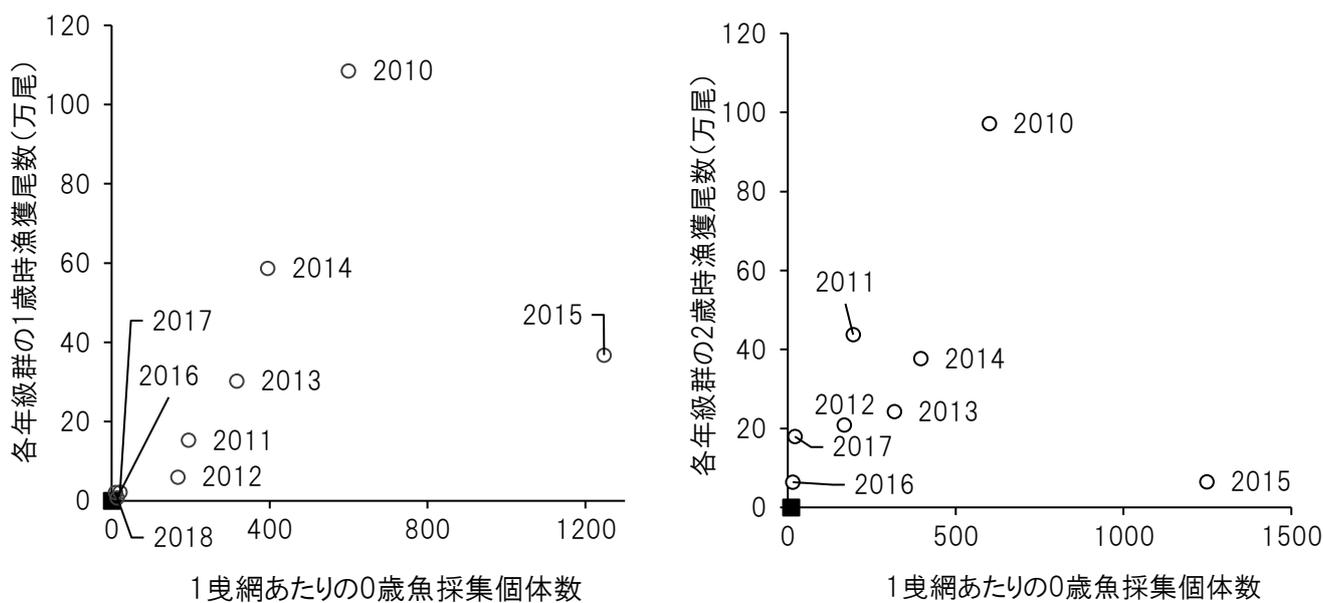


図9 シシャモ調査で採集された0歳魚の1曳網あたりの採集個体数と各年級群の1歳および2歳時の漁獲尾数との関係(2010年級群以降)

両図中の数字は年級群を示している。

左図の■は2020年に1歳魚となる2019年級群の、右図の■は2020年に2歳魚となる2018年級群の0歳時採集個体数の位置を指す。